



# 掃除屋

人食い吸血鬼に捕獲され  
貪り喰われる美女達

作者

大黒達也

## 掃除屋

### 『あらすじ』

人口三千人あまりの山村が、吸血鬼の毒牙にかかり、大半の住人が吸血鬼と化す。警察庁警備局に所属し、ヴァンパイアハンターとして訓練された男、九竜直人が、部下のアリサの後方支援を受けながら単身、村にのり込む。

旅行者や村の住人である若い女達は、激しい陵辱の末に全身の血を吸われ、柔肉を食糧とし貪り食われる。吸血とカニバリズムが果てしなく繰り返される。

### 『登場人物』

九竜くりゆう 直人なおと

ヴァンパイアハンター。年齢三十五歳。破壊工作や射撃

の腕は超一流。

沖田 おきた  
忍 しのぶ

九竜が想いを寄せる美女。年齢二十四歳。

アリサ

九竜の部下。一流モデルや美人女優も及ばぬほどの抜群のポジションと美貌の持ち主。

沖田 おきた  
源蔵 げんぞう

忍の祖父。高齢でありながら、人並み外れた体力の持ち主。

大友 おおとも  
明 あきら

ひとつの村を支配する吸血鬼の主。忍に想い寄せる。

『目次』

プロローグ

第一章 人肉料理

第二章 再会

第三章 呪われた街

第四章 悪鬼の群れ

第五章 脱出

第六章 救出

エピローグ

『本編』

プロローグ

夜の帳が下りようとしていた。黄昏時のススキノは、会社帰りのOLや観光客で賑わっていた。ススキノの一角にある雑居ビルの地階に、TIMEという名のスナックがあった。金曜日ということ、♾️つあるボックス席

と十人掛けのカウンター席は既に満席となっていた。カ  
ウンター席の右端に、上下黒色のスーツを着た長身の男  
がグラスを傾けていた。年齢は三十代半ばといったとこ  
ろだろうか、浅黒く引き締まった精悍な顔立ちをしてい  
た。その隣では、スーツ姿のOL風の美女が男に話し掛  
けていた。

「札幌の人ですか？」

「そうだけど」

男は、前を向きグラスを指先で弄びながら答えた。

「誰かと待ち合わせですか？」

女がそのグラスを見ながら、なおも聞いてきた。

「いや。この店ではいつもひとり飲んでる」

男は女の方を見ないで、静かに言った。

「お邪魔でしたか？」

「いや。美人は大歓迎だ」

男はグラスを置いて、女の方を向いた。男は、女の顔

をじつと見詰めた。切れ長の二重瞼が美しかった。鼻の高さも丁度いい。二十歳をすぎたばかりだろうか。素肌が瑞々しかった。

「ご一緒していいですか？」

「いいよ」

「あの……。言い難いんですけど……」

「何？」

「私、お金に困っていて……」

女は決心したように男の瞳を覗き込んだ。

「借金でもあるのかい？　で、いくら欲しいんだ？」

「三万円のホテルまでお付き合いさせていただきます」

「援助交際の誘いという訳か」

男は苦笑を浮かべながら、懐から警察手帳を取り出して、女に見せ付けた。

「君を売春防止法の容疑で逮捕する」

「ま……。待って下さい。今のは、冗談です」

女は慌てて席を立とうとした。男は、女の腕を掴み、開いている方の手でポケットからMDを取り出して、再生してみせた。会話の一部始終が録音させていた。

「何でも冗談と言えば済むわけではないんだ」

男は、二人分の料金をカウンターテーブルの上に置き、蒼白な表情をした女の腕を取り、店から連れ出した。タクシーを拾い向かった先は、警察署では無く、大通公園近くにある民家だった。高層ビルの谷間に立つ、三階建て鉄筋コンクリート製の建物だ。玄関には、九竜（クリユウ）という表札がかけられていた。

「ここは何ですか？警察署じゃない！」

「見ればわかるさ。俺の自宅だよ」

「騙したのね」

「いや。俺が警官というのは本当だ。何なら今から、警察署に行こうか？」

男は、再び女の腕を掴み、走り去ろうとしているタク

シーを止めようとした。

「待つて下さい。何でも言うとおりにしますから」

男は、泣き出しそうになった女を抱き締め、唇に吸い付いた。ミニスカートの中に手を差し込んで、パンティストッキングとパンティの中に手を差し込み、生尻を揉みしだいた。裏通りということもあり、人通りはほとんど無かった。男は女を抱き上げ、鋼鉄製のドアを押し開けた。

「お帰りなさい」

驚くべきことに、玄関では全裸の若い女が二人を待つていた。女は長身で百七十八センチほどもあるだろうか。手足が長く、スーパーモデルも及ばぬような容姿を持っていた。乳房や腰の張りも十分であり、さながら現代に蘇ったアマゾネスである。

「売春容疑で捕まえた」

男はそれだけ言って、抱いていた女を手渡した。背の

高い女が軽々と両手で女を抱き受けた。

「了解！」

背の高い女が、捕まえた女の胸元から見える谷間をねつとりとした視線で見詰めていた。

「シャワーを浴びてから、飯にする」

「わかりました。今日は警視の好きな刺身にしました」

警視と呼ばれた男は、この家の主である九竜直人（クリュウ ナオト）であり、女は部下の井上（イノウエ）アリサであった。

二人は警察庁警備局に、秘密裏に特設された特殊二課に所属していた。元々は二人とも陸上自衛隊のレインジヤー部隊に所属していた。特殊二課に移籍させられた九竜が、井上を引き抜いたのだ。ふたりの専門は、橋梁やビルなどの建築物を高性能爆薬で破壊する破壊工作であった。銃器の扱いもトップクラスの腕前を持っていた。

九竜が、シャワーを浴び、バスローブを羽織、三階に

ある居間に向かった。

三階部分には中央に百畳ほどもある中庭が造られ、居間や寝室が中庭を取り囲むようにして造られていた。中庭には温水プールや広葉樹が植えられた小さな林が造られていた。

五十畳ほどの居間は、二十畳ほどのダイニングキッチンと繋がっていた。九竜は冷蔵庫から缶ビールを取り出し、タオルで洗い髪を拭きながら、六人かけのダイニングテーブルに付いた。テーブルには、一人分の夕食が準備されていた。アワビやウニやホタテ等の盛り合わせや、茹でた毛蟹が一匹大皿に脚をもがれた状態で大皿に載せられ、オイルサーディンとレタスのサラダも小皿に品よく盛り付けられていた。九竜はいつものことながら、アリサの器用さに舌を巻いた。アリサは任務を遂行しながら、身の回りの世話もしてくれた。

「ああ……。いい……」

そのとき、居間の方から女の喘ぎ声が聞こえて来た。九竜は苦笑しながら、缶ビールを手にして席を立った。声のした方に向かって歩き出した。グラランドピアノの影となり見えなかったが、居間のソファアークテーブルに先ほどの女が、全裸で横たえられていた。女の股間には、これまた全裸のアリサが張り付き、クリトリスや膣を一心腐乱に舐っていた。

女はあまりの快感に忘我の域を彷徨っていた。アリサは男でも女でも愛することが出来るバイセクシャルであった。九竜はアリサに室内にいるときは、全裸でいるように命じていたのだ。アリサ自身も露出趣味があり、全裸でいることを楽しんでいた。

「何かわかったか？」

「警視。いらしたのですか？」

アリサが女の愛液に濡れた顔を上げた。

「まあね」

「女の名前は加川真由美といいます。年齢は二十二歳。大手商社に勤めるOLです」

「それで女をどうするつもりだ？」

「この女けっこう派手好きで、サラ金に多額の借金があるとのこと。それで売春を続けていたようです。会社には長期の休暇願を出させることにしました。自分、助手として雇うつもりです」

「助手？」

「警視や私の世話をさせるつもりです」

「真由美は承知したのか？」

九竜は改めて、呆然とした表情で天井を見詰める真由美の顔や乳房を眺めた。モデルも及ばぬほどの美貌にシミひとつない美肌の持ち主だった。

「売春の罪を問わず、借金も肩代わりしてやるということでした」

「そうか」

九竜はガウンの前をはだけ、黒々とした男根を剥き出しにした。それを真由美の顔に擦りつけた。

「真由美。ぼやぼやしていないで、警視のアレを舐めるのよ」

真由美は、はっと我に帰り、男根を喉の奥に飲み込んだ。若いにもかかわらず、中々のテクニシャンだ。男根を舌先で舐りながら、指で睾丸を擦ってきた。アリサが九竜のアヌスに指を這わせてきた。九竜はぼんやりとした表情で、揺れ動く真由美の頭を見ていた。最初から真由美を逮捕する気などは無かった。一時の気休めに過ぎなかった。それに九竜やアリサの任務は、売春などの軽犯罪は管轄外であった。

九竜は夕食を済ませ、二時間ほどDVDの映画を見ながら居間で寛いだ。

アリサは、真由美と一緒にシャワーを浴び、自室に戻っていた。

十一時頃に三階にある自室へと向かった。二十畳ほどの部屋の中央には巨大なダブルベッドが鎮座していた。窓の内側には、頑丈な鉄格子が嵌められていた。各部屋の窓も同様な造りとなっていた。寝室と繋がっている六畳ほどの書斎スペースには、木製の机が置かれ、その上にはデスクトップパソコンに接続された液晶モニターが載せられていた。

パソコンの電源を入れ、起動してから、メーラを立ち上げた。数通の新着メールが届いていた。一通に目を通した。それは新しい任務を知らせるものだった。詳細内容が書かれた書類を印刷し、パソコンを停止させた。

少し気になったので、隣接するアリサの部屋を見に行った。部屋をノックし、ドアを開けた。中央のダブルベッドでは、全裸の真由美が仰向けに寝かされ、同じく全裸のアリサが、真由美の股間に座り両手を一心不乱に動かしていた。

アリサの両手の長い指先が、両足を開き切った真由美のアヌスと膣に入れられ、中を掻き回していた。真由美は目を閉じてシーツを両手で握り締め、喘ぎ続けていた。九竜はふらふらと中に入り、アリサの背後から、アリサの腰を持ち上げ、怒張した男根を膣に挿入した。大きく盛り上がった白い尻を抱き、腰を前後左右に振りたくった。

「直人ったら。エッチなんだから」

ベッドでは立場が逆転した。アリサに腕を取られ、真由美の横に寝かされた。男根を掴まれ、真由美の膣に導かれた。ズブリという音を立てて、膣に飲み込まれた。締め付けは強烈で眩暈がするほどであった。九竜は思わず女のような喘ぎ声をあげていた。

アリサは九竜を真由美の背後から結合させ、九竜のアヌスを指先で弄んだ。九竜は、真由美の重たげな乳房を両手で揉みながら、腰を緩慢に振った。アリサの指先が、

九竜の前立腺を刺激してきた。電撃のような快感が全身を貫き、真由美の中に放出し続けた。真由美もいったようで、膣内が脈動していた。

アリサは、ぐったりとした真由美の両足を大きく広げ、膣内に指先を二本束ねて挿入し、暫くグラインドさせた。さらに指の数を増やしていき、最後には五本すべてを差し込んだ。真由美が絶叫のような喘ぎ声を上げ、大量の潮を噴いて失神した。

翌朝、九竜はアリサのベッドで目覚めた。隣から女の喘ぎ声が聞こえていた。アリサが真由美をうつ伏せにして、尻の割れ目に顔を入れアヌスを舐っていた。

「アリサさん。もう許して……。逝かせて下さい」  
真由美が涙目になり、悩ましげに喘いでいた。

「何言っているのよ。生意気な口はきかないことね。あ

んたは犯罪者なのよ」

アリサが愛液に濡れた顔をあげた。瞳は欲情のために濡れていた。

九竜は、肩肘を立てその様子を眺めていた。三人とも全裸だ。アリサは腰にペニスバンドを装着していた。すぐに股間が痛いほどに怒張ってしまった。アリサが真由美のアヌスを舌で責めながら九竜の男根に手を伸ばして来た。

「さあ。このチンポを舐めるのよ。直人、中に出していいのよ。この淫売に飲ませてやって！」

真由美の顔が股間に覆い被さってきた。パクリといった感じで怒張した男根を飲み込んだ。真由美の背後ではアリサが立膝について、真由美のアヌスを舐めた。モデルも及ばぬような美女が、眉間に皺を寄せフェラチオする様は、劣情的であった。九竜は真由美の黒髪を鷲掴みにしながら喘いでいた。

アリサが九竜のアヌスに指先を捻じ込んで、昨夜と同様に前立腺を刺激してきた。脳が弾ける様な快感が突き抜けた。真由美の口内にすべてを放っていた。

午前七時。六人かけのダイニングテーブルには、九竜とアリサが席についていた。真由美は裸身にエプロンをつけただけの格好で、給仕を行っていた。アリサは全裸だ。九竜はジーンズに黒いシャツを着ていた。

「アリサ。新しい任務だ。今日出発する」

「今日ですか？」

「そうだ。これから作戦を説明する。その前にこいつをかける」

九竜はレイバンのサングラスを手渡した。自分も同じ物を使った。手元にあつたりリモコンスイッチで壁掛け液晶モニターの電源を入れた。砂嵐状態で何も映っていない

かった。

「秦野代議士じゃないですか！」

モニターを凝視していたアリスが叫ぶように言った。

近くで配膳をしていた真由美が何も映っていないモニターを見て小首を傾げた。どうやら、サングラスをかけなければ、何も見えない仕掛けになっているようだ。

「そのとおりだ。奴はデイウォーカーだ」

「新タイプですか？」

「そうだ。昼間でも自由に活動できる。十年前、ヨーロッパへの視察旅行の際に感染したらしい。奴は今年で六十になる筈だが、十年前と少しも変わっていない」

九竜の言うとおりモニターに映し出されている秦野の髪は、黒々としており老いの片鱗も見せてはいなかった。

「もうひとりも汚染されているのですか？」

アリスは秦野と並んで映っている若い女を見詰めて

いた。

「気に入ったのか？最高の美女だろう。彼女は秦野の秘書だ。岸田由香。年齢二十八歳。東大出の才女だ。彼女については汚染されているかどうか確認はされていない」

「犯罪履歴は？」

「十年間に百三十二名が犠牲となっている。皆、若くて美しい女ばかりだ」

モニターには全被害者の全身写真が映し出されていた。九竜の言うとおり、皆美しい容姿を持っていた。

「遺体は見つかったのですか？」

「一体だけな。食害を受けていた」

「食害？」

九竜は説明しながら、リモコンを操作した。画面が変わり、広さ三十畳ほどの食堂が映し出された。六人かけのテーブルには、大皿の上に人間の尻や腕の部分が載せ

られていた。

「調理され食われていたんだよ。これは、ある高級リゾートホテルのスイートルームで撮影されたものだ。奴が長期間使用していた部屋で、食堂に残されていた証拠物件さ。別働隊が、急襲したんだが、部屋は蛇の殻で、誰もいなかった。証拠物件は、特殊一課が回収している。奴は吸血だけではなく、被害者を調理して喰らっているようだ。アリサお前も気をつけるよ。作戦が失敗すれば、血を吸われるだけではなく、調理され食われてしまうぞ」

九竜はネットリとした視線を裸の乳房に向けた。アリサの瞳がとろんとした感じになっていた。

「真由美。こっちに來て」

アリサは真由美を呼びつけて、テーブルの下に押し遣り、自分の股間に顔を押し付けさせた。すぐにピチャピチャといういやらしい音が聞こえて來た。

「感じたのか？」

「朽ち果てて、ウジやネズミに食われるよりはいいですよ」

「お前の肉なら俺も食ってみたいよ」

「本当ですか？」

「仕事が終わったらな。二人とも生きてはいないかも知れないが」

「二人は今、何処にいるのですか？」

アリサが話題を切り替えた。

「ニセコの別荘でバカンスを楽しんでいる筈だ。今日中に二人を始末する」

九竜邸は、一階が車庫と倉庫になっており、二階から上の部分が事務所兼居住スペースになっていた。一階の倉庫では、アリサが作業着に着替え、作戦の準備を行っ

ていた。二十畳ほどの室内の壁一面が、銃器や弾薬等の収納スペースとなっていた。アリスは室内の中央に置かれた作業台に作戦用の銃器や弾薬を並べていた。SPA十五カスタムが十丁並べられていた。外観はアサルトライフルのM—一六に似ていた。室内専用なのか、銃身を短く切り詰め、箱型弾装を装着していた。装弾数六発。弾丸は散弾とスラッグ弾の二種類を用意していた。両方とも弾頭には、すべて高性能炸薬を充填している。

至近距離で高性能炸薬入り九発弾の破壊力は凄まじく、人間なら上半身が吹き飛ぶほどの威力だった。一方スラッグ弾も五十メートル以内の距離であればライフ銃並の命中精度を有していた。破壊力も凄まじく、頭部に当れば粉々に粉砕するほどの威力だ。銃身の上部には暗視スコープを、下部にはレーザー照準機がセットされていた。

アリスは、SPA十五の点検を終え、次に短銃を作

業台に並べた。二種類あった。レイジングブル四五四の四インチモデルにデザートイーグル五十A Eをそれぞれ五丁並べた。両銃ともに、レーザー標準機と暗視スコープを具備したカスタムタイプであった。弾丸にはやはり高性能炸薬が仕込んであった。

アリサは、銃器と弾薬の点検を終え、今度は爆薬の点検を始めた。いかなる形状にも整形可能なプラスチック爆薬や携帯用のナパーム弾を用意した。

武器弾薬の点検をてきぱきとした手順で済ませ、移動用車両の整備点検に取り掛かった。移動用車両はキャンピングカーのモビリア リアルタを改造したもので、外装は五ミリ厚の特殊チタン合金を使用し、五十口径弾にも耐えうる仕様となっている。窓ガラスも当然、防弾仕様であった。

内部構造は、最後部の就寝スペースを武器庫に改造してあった。中央部分は作戦室となっており、各種モニタ

ーやパーソナルコンピュータが置かれ、通信衛星より送信される情報の解析・表示用機器として使用される。

長期間の使用に備え、バス・トイレやキッチンスペースは従来品をそのまま使用していた。各椅子も簡易ベッドになりうる快適性を備えていた。外観は普通のキャンピングカーと何ら変わらないが、高機能な作戦遂行能力を保持していた。

その頃、九竜は二階の事務スペースにいた。二十畳ほどの広さがある専用ルームで、パソコンを駆使して秦野代議士に関する情報収集を行っていた。

時折、気分転換のために部屋の入り口近くに置かれた秘書机に向かった。そこには制服に着替えた真由美が席に付いて、インターネットサーフィンをしながら電話番をしていた。制服のスカートから覗く太腿が眩しかった。

九竜は、背後から抱き付き、豊満な乳房を揉みながら、真由美の口に吸い付いて舌を存分にしゃぶった。真由美

は既に九竜やアリサの意のままとなっていた。高額な借金の肩代わりをしてくれ、さらにOL時代の何倍もの報酬が貰えるとするれば当然のことかも知れない。しかも、九竜は美男子の部類に入り、アリサは超がつくほどの美女であった。同性愛の経験が無かった真由美ではあるが、アリサの美貌とテクニクに溺れかけていた。

九竜は舌を舐るだけでは満足せず、スカートとパンティを脱がせ上半身を机に押し付け、突き出された白いすべすべの尻を抱いた。真由美は気持ちよさそうに喘ぎ声をあげるばかりであった。

## 第一章 人肉料理

午後六時三十分。場所はニセコの山中。九竜とアリサが乗る作戦車のモビリアリアルタが、秦野代議士が所有する別荘から一キロほど離れた地点に停車していた。

二人は運転席では無く中央の作戦室に入り、モニター

を見詰めていた。二人とも上下黒の戦闘服に着替えていた。隠しカメラは特殊一課が、主の留守中に仕掛けたものであった。

モニターには、別荘内部の様子が映し出されていた。私服に着替えた秦野と若い女が、居間で赤ワインを飲みながらイタリア製のソファで寛いでいる様子を捉えていた。女は秘書の由香と、同程度の美貌の持ち主ではあったが、別人であった。

「警視。たった今、中央司令部から連絡が入りました。秘書の由香をニセコ町のホテルで確認したそうです」

「由香は汚染されていないかも知れないな」

九竜がモニターを見ながら言った。そのとき、モニターに映っていた秦野が動いた。女の隣に移り、ワイングラスをソファテーブルに置いて、静かに抱き付いた。

「警視。女が殺されます！」

アリスが九竜の顔をじつと見詰めてきた。

「まで。慌てるな。奴は目覚めているんだ。今、行ったところで逃げられるか、帰り討ちにあうのが落ちだ。女は諦めるしかない」

九竜が話しているうちに異変は起きた。女が秦野を引き離そうともがき出した。秦野は女の首筋に顔を付けていた。女は長い手足を痙攣させ、両目を見開き、苦痛に顔を歪めていた。隠しマイクが女の苦しげな呼吸音を捉えていた。

秦野が顔を上げて、何かを飲み込んだ。女の首筋が噛み裂かれている様子が映し出された。女が白目を剥いて、失神した。再び、秦野が女の衣服を手で引き裂きながら、首筋に喰らいついた。音を立てて流れ出る鮮血を啜っていた。

惨劇は五分も続かなかった。秦野が全裸に剥いた女を抱え上げ、キッチンの方に消えた。モニターの画像がキッチンの様子に移り変わった。

秦野は、女の血で汚れたシャツの上に、エプロンを羽織、調理台の前に立っていた。調理台には殺された女的全裸死体が横たえられていた。秦野が大振りの肉切り包丁を使い、女の手足を切断していく。血を吸い尽くされているのか出血はあまりなかった。首を刎ね、腹部を切り開いて、血塗れの内臓を両手で掻き出していた。隠しマイクが秦野の鼻歌を捉えていた。

内臓をすべて取り除いた空洞をホースで水洗いをして、中にオリーブオイルを塗り込み、米や野菜を詰め込んでいった。

その後、解いた卵黄と混ぜ合わせた岩塩を胴体に塗り付け、アルミホイルで覆った。それを巨大なオーブンレンジに入れスイッチを押した。

さらに調理は続いた。取り出した肝臓を調理台の上で薄切りにしていく。

切取られた手足はぶつ切りにされ、野菜とともに大鍋

に入れられ火にかけられた。

調理は三十分ほどで終了し、秦野はダイニングキッチンに置かれた食卓テーブルの席に付き、大鍋の火加減を伺いながら、赤ワインを飲み、女の肝臓をスライスした刺身に舌鼓を打っていた。

九竜はモニターに映し出される映像を平然と見ていたが、アリサは途中からトイレに籠ってしまった。しきりに嘔吐する音が聞こえて来た。

一時間後、時刻は午後八時を回っていた。モニターには、正装した秦野が、ひとり食卓テーブルに付いている様子が映し出されていた。

テーブルには、手足や頭部を切断され、アルミホイールに包まれた女の胴体が大皿に載せられていた。火に掛けられていた大鍋もテーブルの上に置かれていた。

秦野が満面に笑みを浮かべながら、両手でアルミホイ

ルを剥がして行く。中から岩塩に包まれた胴体部分が出てきた。熱で固まった岩塩を叩き割り、内部を露出させた。大量の水蒸気が立ち登った。胴体部分は完全に熱が通っているようだ。

秦野は手掴みで、腿肉を引き裂き口いっぱい頬張った。隠しマイクが秦野の深い溜息を捉えていた。つい一時間ほど前まで生きていた女が、肉となり今秦野によって食われていたのだ。

秦野は女の腿肉を貪り喰い、両手で腹を割いて肉汁がしみた米や野菜をシャモジで掻き出し、器に盛りガツガツといった感じにかきこんだ。

女の胴体を裏返しにして、盛り上がった尻にそのまま齧りついた。隠しマイクが獣のような唸り声を捉えていた。尻肉を食い千切り、咀嚼し飲み込み、赤ワインをあおった。

午前一時三十分。寝室の隠しマイクが、秦野の深い寝

息を捉えていた。

作戦車の中では、九竜とアリサが無言で、銃器類や弾薬を装備していた。

特殊カーボン繊維の素材で作られたヘルメットを着した。暗視ゴーグルをかけ、ヘルメットと同じ素材で作られた防弾ベストを着た。九竜はこれで安全とは思っていなかった。ヴァンパイアの強力無比な怪力の前では気休めに過ぎなかった。

レイジングブル四五カスールカスタムを、左側の腰のベルトに装着したホルスターに差し込んだ。九竜にとりこれが十字架のかわりであった。

主要装備はSPAS十五カスタムだ。レーザー照準器と暗視スコープの動作確認を忘れなかった。最後にプラスチック爆薬やナパーム弾をリュックに詰め背負った。

一方、アリサはレイジングブルではなく、デザートイーグルカスタムで武装していた。今回の攻撃役はアリサ

だった。九竜はバックアップにまわる。

アリサは上下黒の防弾スーツや下着も脱ぎ、全裸となった。身に付けている物は、暗視ゴーグルとデザートイーグルカスタムのみだ。全裸で攻撃を仕掛けることで相手の意表を付く作戦であった。夜目が効くヴァンパイア限定であるが。これはアリサのアイデアである。もちろん、九竜が攻撃役の場合は、全裸にはならない。

二人は作戦車を降り、徒歩で秦野邸へと続く林道を歩いた。街路灯などは無く、暗視ゴーグルだけが頼りであった。アリサは全裸に薄皮のロングコートを羽織っていた。

五分ほどで秦野邸に到着した。鉄柵で囲まれた数千坪はある敷地内に、ライトアップされた白亜の豪邸が聳え立っていた。

特殊一課の調査結果では、築一年の新築と言うことであるが、九竜は、悠久の年月を経た城郭のように感じて

いた。見ているだけで総毛立つような禍々しさも感じられた。この時ばかりは、特殊一課ではなく、二課に配属されたことに貧乏くじを引いたような気分になる。一課は情報収集が専門で、攻撃や破壊などの任務には付かない。それはすべて二課の役割だった。汚染を最小限に食い止めるための措置であった。

アリサの感じ方は違っていた。九竜同様、言い知れぬ恐怖を感じていたが、同時にエロティックな気分にもなっていた。秦野に組み敷かれ、生血を吸われた後で、生きたまま貪り食われるイメージが脳裏をよぎった。尿意も感じていた。

門扉を開け、静まり返った敷地内に足を踏み入れた。石畳のアプローチを進み、玄関の戸口に立った。オーク製の大扉に鍵はかかっていなかった。山奥であるということや、吸血鬼である秦野にとり恐れる者など存在しないのだ。

邸内は照明が消されていたが、暗視ゴーグルを付けているので視界は確保できていた。

居間ほどもある玄関で、アリサは靴と薄皮のロングコートを脱ぎ、大きく深呼吸をし、九竜に手で合図を送り、全速力で駆け出した。

九竜は暗視ゴーグルを通して、アリサの盛り上がった白い尻が揺れ動く様を見ていた。アリサは階段を一気に駆け上った。秦野は目覚めている筈だ。しかし、完全に覚醒するまで、数秒の猶予はあった。アリサは寝室への経路を正確に記憶していた。数秒が、数分にも思えた。自分の心臓の鼓動を聞いていた。

寝室のドアを蹴破り、中央に置かれたダブルベッドに向けて、デザートイーグル五十AEカスタムの引き金を絞り続けた。ダブルベッドのマットレスがズタズタに引き裂かれていく。あつという間に全弾撃ち尽くした。

そのとき、部屋の照明がつけられ、背後から抱き付かれた。暗視ゴーグルを外され、両手首を束ねて、片手で掴まれた。振りほどこうとしたが無駄な抵抗だった。

「驚いたな。素っ裸の女が殺し屋とは。しかも最高の美女ときている」

テレビで聞きなれた秦野の声が、耳元に聞こえていた。首筋に息を感じていた。おぞましさに息が詰まりそうだった。

「さつき女を丸ごと喰ったが、お前の方が美味そうだ。

どこから食べて欲しい。ここか？」

秦野の筋張った手の平が、重たげな乳房を驚掴みにしてきた。

「それともこっちか？」

盛り上がった白い尻を撫で回され、いきなりアヌスに指を差し込まれ、中を掻き回された。

「いやー」



アリサは背筋を仰け反らせ、思わず失禁してしまった。  
身長が自分より十センチも低い秦野に好きだけ愚弄  
されているのだ。

「ははは。いい女はショウベンも美味ときている」

36 秦野はアリサの尿を手で受け、それを舐めていた。アリ

サは失禁のショックでぐったりとしていた。全身から力が抜け、秦野にもたれかかっていた。いきなり抱き上げられ、ズタズタに引き裂かれたベッドの上に横たえられた。

「お前を食う前に犯してやる」

長く形にいい両足を大きく広げられ、尿で濡れた膣を舐られた。クリトリスを激しい勢いで吸われた。漣のような快感が全身を通り抜けていく。次第に恐怖感は薄れ、脱力感とともに、鬼火のようなほの暗い欲情が、燃え上がってきた。何時の間にか喘ぎ声を上げていた。

「淫売が！いい声で泣きやがる」

秦野は毒づきながら寝巻きの下を脱ぎ捨てた。下着は付けていなかった。黒々とした男根が、そそり立っていた。

その時、秦野の額に赤い光点が見えた。同時に炸裂音が聞こえ、秦野の頭部が粉々に吹き飛んだ。鮮血と脳漿

が吹き上がり、天井を真紅に染め上げた。

秦野は鼻から上を吹き飛ばされながら、なおも立っていた。男根から性液が迸った。SPAS十五のスライドを引く音が聞こえ、続いて銃声が鳴り響いた。

秦野の腹部が爆発し、直径二十センチほどの大穴が穿たれた。なおも銃声が途絶えることは無かった。手足が吹き飛ばされ、床に胴体とともに転がった。

九竜が、銃弾によって割られたベランダのガラス戸を開け部屋に入ってきた。

「遅かったじゃない！」

アリサが涙目で叫びながら抱き付き、唇を重ね食べるように九竜の舌を舐ってきた。

「後でな」

九竜はアリサの頭を撫ぜ、優しく声をかけながら引き離した。リュックから、プラスチック爆薬とナパーム弾を取り出し、引き裂かれた遺体の周りにセットし寝室を

後にした。

作戦車に戻り、九竜が爆薬の起爆装置を遠隔で作動させた。秦野邸の方角が一瞬昼間のように明るくなり、大地を揺るがすような振動とともに空気を切り裂くような爆音が聞こえて来た。アリスが全裸のまま、九竜に抱き付いて来た。もどかしげに九竜の着衣を脱がせ始めた。九竜を全裸に剥いて、股間に喰らいつき男根を飲み込んだ。すぐに勃起した男根を騎上位で膣に挿入し、自ら腰を前後左右に振り始めた。

「今夜のことを忘れさせて。お願い！」

ニセコにあるNホテルのバーに、秦野の秘書である岸田由香が、カウンター席に座りひとりグラスを傾けていた。店内には由香の他に、男性客が四名だけボックス席で飲んでいた。後はバーテンダーが一名だけだ。実は、その店員も男性客達もすべて特殊一課の刑事達であつ

た。

由香は数時間かけてかなりの酒を飲んでいった。酔いも相当に回っているようだ。そろそろ帰ろうとしていた時、近くにモデルのような若い女が立った。

「ここ、座っていいかしら？」

「どうぞ」

黒髪を肩先まで伸ばし、ハーフを思わせるような彫りの深い顔立ちをした女はアリサであった。アリサは、由香が自分のミニスカートから食み出した生足を一瞬凝視するのを見逃さなかった。アリサには、由香が自分同様、男でも女でも愛せるバイセクシャルであることを見抜くことができた。一課の調査結果どおりであった。

「待ち合わせですか？」

「残念だけど、ひとりで飲んでいたところよ。貴女は？」

「同じです」

「そう。バーテンさん。この娘さんに……」

「アリスといます」

「アリスさんに何かカクテルを作ってあげて」

「有難うございます。あの……」

「私？岸田由香って言うのよ。由香でいいわ」

由香は名乗りながら、自然な感じでアリスの太腿に手の平を這わせてきた。アルコールの影響もあつてか、いつもより大胆になっていた。

アリスは由香の手を軽く握り締めた。

「お姉さんと呼んでいいかしら？」

「いいわよ。貴女より私の方が年上みたいだし。幾つになるの？」

由香は満面の笑みを浮かべ、アリスの太腿を撫で上げた。

「二十四歳です。お姉さんは？」

アリスは甘えた声で聞いた。

「二十八よ。そうだわ。私の部屋に来ない？美味しいワ

インがあるのよ」

由香はアリサの瞳をじっと見詰めた。まるで獲物を狙う目付きのようであった。由香は立ち上がり、アリサの腕を取って立たせた。

「アリサちゃんは背が高いのね。それに凄くステキな身体よ」

「お姉さんも綺麗よ」

由香はアリサの腰に腕を回し、エスコートするようにしてバーを後にした。

エレベータに乗ってすぐに由香は求めてきた。アリサを両手で抱き締め、キスしてきた。アリサは目を閉じて為すがままだ。たとえ、由香が汚染されていたとしてもキスぐらいでは感染しないことは確認済みだ。由香の部屋に入り、アリサはベッドに押し倒された。



「シャワーを使わせて」

「まだ駄目よ。アリサちゃんの匂いを嗅ぎたいの」

もどかしげな手付きで、アリサのミニスカートをたくし  
上げ、パンティを引き降ろした。太腿を押し広げ、中心

に息づくサーモンピンクの膾に魅入っていた。

「いや。恥ずかしいわ」

「アリサちゃんのオマ\*コ、凄く綺麗よ。舐めさせてね」  
由香の柔らかい舌がアリサの膾やクリトリスの上を這い回っていた。アリサは内心いつ噛みつかれるか気が気では無かった。

「美味しいわ。アリサのオマ\*コ。今度はお尻の穴も舐めさせてね」

こうなったら、従うしかなかった。四つん這いにされ、尻の合間に顔を入れられた。長い舌がアヌスにあてがわれ舐られた。片手で乳房を揉まれ、白魚のような指先でクリトリスをなぞられた、あまりの快感にアリサは我を忘れ、美尻を上下に動かし、由香の顔に擦り付けていた。爛れるような快感に任務のことなど忘れ去っていた。アヌスを舐る柔らかな舌の感触にすべてを支配されていた。

「もう駄目。お姉さん。許して！」

アリサは美尻を淫らに振りながら、咽び泣いた。

「いいわよ。お姉さんが逝かせてあげるわ」

由香が、アリサの尻の合間に顔を強く押し付けてきた。いつそう激しくアヌスを舐ってきた。

アリサが絶頂を迎えようとしたその時、ドアが乱暴に開け放たれ、麻酔銃を左手に、レイジングブルを右手に持った九竜が乱入してきた。アリサの尻を舐めていた由香の背中に麻酔弾が突き刺さり、一瞬で意識を失った。

「こいつは汚染されてはいないようだ」

九竜が由香の背中に刺さっていた麻酔弾を引き抜いた。

「何でもっと早く来てくれないの？お蔭で生殺し状態よ」

アリサが衣服を身に着けながら、恨めしげな顔で九竜を睨み付けた。

「わかった。そうむくれるな。帰ったら好きだけ逝かせてやる」

「本当？」

「ああ。約束する。その前に、この女を運ばないとな。手伝ってくれ」

翌日の午後二時。由香を確保し、九竜邸に戻った二人は、地下の検査室で、簡易ベッドの上に横たわる由香の裸身を見詰めていた。二人とも白衣に身を包んでいた。九竜は愛用のレイジングブル四五四カスールを由香のコメカミに押し付けていた。由香は麻酔から覚めたばかりであり、怯え切った表情で、アリサや九竜の顔を交互に見ていた。

「貴方達はいったい何なの？私をどうするつもり？」

「まずは、傷の有無を調べる。それから尿検査だ。最後に血液検査を行う。アリサ。始めてくれ」

九竜は由香をまったく無視していた。少し離れたとこ

ろに置かれた椅子に腰掛けた。レイジングブルは由香の頭部を狙ったままだ。

「わかりました」

アリサは、まず上半身から調べ始めた。最初に首筋を確認した。次に由香の手を持ち上げ、脇の下に顔を近づけて舐めるような視線を向けた。乳房を手で掴み時間をかけて傷の有無を確認した。

「止めて！何するのよ」

由香が身をよじり、アリサの手から逃れようとした。

アリサが九竜の顔を見詰めてきた。九竜は深く頷いただけだ。次の瞬間にはアリサの右拳が由香の鳩尾にめり込んでいた。

「うっ……」

由香は低い呻き声を上げ、静かになった。由香をうつ伏せに横たえ、背中を調べた。異常が無いことを確認し、尻の膨らみを調べ始めた。剥き卵のようにすべすべで白

い尻の表面を両手で割りアヌスを剥き出しにした。

「触診検査を始めます」

アリサは由香に四つん這いの姿勢をとるように促せた。背後から由香の股間を覗きこみ、口を付け膣とアヌスを交互に舐り始めた。

「止めて！お願い……。そんなことしないで……」

由香が嗚咽を漏らし始めた。十分に濡れたところで、手術用の手袋を嵌め、人差し指をまず、膣口に挿入した。指先で膣壁をなぞるように動かした。

「異常ありません」

膣から抜かれた指先は由香の愛液で濡れていた。

「次にアヌスを検査します」

指先をアヌスに押し当て、ゆっくりと捻り込ませた。

「痛い！もう許して」

由香は美しい額に皺を寄せ号泣した。白い裸身が苦痛に身悶えしていた。アリサは無表情に指先を奥へ奥へと、

押し込んでいく。指の根元まで差し込んで直腸内をかき回した。

「こつちも特に異常はありません」

「肛門鏡を使ってみたらどうだ」

「そうですね。その方が確実だと思います。まずお腹の中をきれいにしますね」

アリサは簡易ベッドの下にあつた箱型の機器からホースを引き出し、先端部分を由香のアヌスに差込、ホースの握り部分についていたスイッチを押した。

ゴボゴボという吸引音が聞こえて来た。由香が額に汗を滲ませ、身悶えしていた。それはすぐに終わり、続いて筒状の肛門鏡をアヌスに差込み内部を覗き込んだ。由香は緊張のあまり消耗したのか、今はぐったりとした表情でアリサに身を任せていた。

「どうやら、大丈夫のようですね」

「一応、股の根元や足の裏も調べておいてくれ。それか

ら尿検査だ」

一時間後、九竜とアリサの二人が二階にある会議室で、由香の検査結果を分析していた。二十畳ほどの室内に会議机が置かれ、液晶プロジェクターがスクリーンに由香の全身写真を映し出していた。

「全身くまなく調べましたが、ウイルスを感染させるための傷口は見つかりませんでした」

「尿検査や血液検査でも白と出ているしな」

「どうします。解放しますか？」

「いや。それはできない。他の感染者と接触する可能性もある。ここは監禁して暫く様子を見ることだ」

地下には被疑者を監禁するスペースが設けられていた。

「はい」

返事をしたアリサの顔がどこかほっとしているよう

にも見えた。万が一、感染していた場合、アリサ自身の手で由香を処分しなければならなかった。そのとき、ドアが静かにノックされた。

「コーヒーをお持ちしました」

「どうぞ」

九竜が液晶プロジェクターの電源を切りながら言った。ドアが開けられ、制服姿の真由美がトレイにコーヒーを載せて現れた。

「本件は一応これで終了した。アリサ、ご苦労だった。

今夜はススキノにでも繰り出すか？」

「作戦費用だいぶ余りましたからね」

アリサが嬉しそうに答えた。

「費用の使い道に付いては一任されている。好きに使うさ。真由美も連れて行こう」

特殊二課は最大限の危険任務のためか、十分な予算を与えられていた。二人とも破格な危険手当を得ていた。

翌朝、九竜は自室で目覚めた。昨夜の深酒のせいで頭の奥がジンジンと痺れていた。隣には真由美が全裸で寝息を立てていた。盛り上がった白い尻に頬擦りをして、アヌスを舐め上げた。真由美はよほど疲れているのか、それでも起きなかった。九竜は夏かけの布団をかけてやった。

ベッドから起き上がり、全裸のまま隣にある書斎に入り、パソコンの電源スイッチを押した。OSが立ち上がってからメーラを起動した。

数件の新着メールに目を通した。九竜はおやつというような表情を浮かべ、一通のメールを読み直した。

それは新しい任務を知らせるメールだった。読み終え、九竜はモニターから目を反らせ、遠くを見詰めるような目つきをした。

パンツとジーンズを穿き、黒のTシャツを着て、地下室の監禁室へと向かった。そこにはアリサがいる筈だ。

案の定、施錠された三十畳ほどの監禁室にアリサを見つけた。ソファセットやダブルベッドや壁掛け液晶テレビが置かれた室内は普通の部屋と何ら変わらない。

ダブルベッドの上では、アリサが由香に組み敷かれ、尻を舐められていた。二人とも全裸だ。アリサは何度もいかされたのか朦朧とした表情を浮かべていた。

「私をいつまで監禁しておく気なの？」

由香がアリサの愛液に濡れた顔をあげ、九竜に話し掛けてきた。

「期間は決めていない。状況次第だ」

「秦野と関係があるのね？」

由香はアリサから離れ、ベッドに腰かけた。

「秦野は死んだよ」

九竜は由香の瞳の奥を覗き込んだ。

「貴方達が殺したのね？」

由香が青ざめた表情を浮かべた。

「ノーコメントだ」

九竜がきつぱりとした調子で言い放った。

「容疑は何なの？」

由香はなおも食い下がってきた。

「君が本当に何も知らないなら、聞かない方がいい。知れば君の記憶を消さなければならなくなる」

「記憶を消すですって！」

驚いたような表情を浮かべた。

「記憶を消す新薬があるのだが、消したい記憶を特定できない。最悪すべての記憶を失うことになる。君がそれを使用することに承諾すれば明日にでも釈放できる」

「……少し時間を頂戴。考えてみるわ」

「此処も満更ではないぞ。隣は遊戯室になっている。サウナやプールもあるし、インターネットも使い放題だ。

外部との連絡以外は自由だ」

「この娘を自由にできるのなら、暫く此処にいてもいい

わ

由香がアリサの盛り上がった白い尻に手の平を這わせた。

「アリサがいいと言うなら異存は無いよ。真由美が妬くだろうな」

「真由美って？」

「私の部下よ。何の関係も無いわ。私は貴女のものになるつもりよ！」

それまで、ベッドに横たわり余韻に浸っていたアリサが起き上がった。

「アリサ。新しい任務の打ち合わせをしたい。会議室で待っている」

九竜が苦笑を浮かべながら背中を向けた。

「後でまた来るから待っていてね」

背後からアリサの甘えた声が聞こえて来た。

## 第二章 再会

道央地方の山間地に位置するK村は、日本で有数の透明度を誇る湖の辺に位置し一千人ほどの人口を抱えていた。主要産業は、林業と観光業であり、村へのアクセス路は道道が一本あるのみで、陸の孤島とも言われていた。

九竜は、村へと続く一本道を作戦車両のモビリエリアルタで飛ばしていた。

少し前、その道を閉鎖していた陸上自衛隊の前哨基地を通過してきたばかりだ。

作戦期間中、彼らはそこを死守するのみで、村への進軍はいつさい行わない。村から出ようとする者を逮捕監視するのが唯一の任務であった。九竜は前進基地を通過した時点で、上下黒色の戦闘服に着替えていた。ベルトのホルスターにはレイジングブルを収めていた。九竜は運転しながら、半年前の記憶を辿っていた。

九竜は友人の頼みで、ひとりの女性を私設秘書として雇っていた。沖田忍、二十四歳になる彼女はモデルも及ばぬほどの美しい容姿を持った女であった。

身のこなしも優雅であり、頭もよく、仕事も的確だった。そんな彼女に妻子ある九竜は、いつしか恋心を抱いてしまった。自分を押さえきれず、ある日、愛していることを告げた。そのとき、忍は嬉しそうな笑みを満面に浮かべ、「有難うございます」とだけ答えた。

翌日、忍は事務所に姿を見せなかった。自宅のマンションを訪ねて見たが、既に引越した後であった。管理人の話では、実家に帰ったとのことだ。偶然にも忍の実家は、K村にあった。

九竜は一路、忍の実家がある湖畔のホテル街を目指していた。忍の父親は村で一番と言われるホテルの支配人をしていた。噂に聞くとところによると忍はホテル経営の手伝いをしているとのことだ。九竜は気が重かった。恋

心を抱き告白までして、結局本心を聞けずに去ってしまった女に会うのは辛かった。

途中、村の中心街を通過した。予想通り、通りに人影はまったく見えなかった。鉄筋コンクリート三階建ての  
村立病院や、村で唯一の中学校前を通るときは、一旦停車して様子を伺った。二箇所ともに地下室があった。

林道を抜けると、日本で有数の透明度を誇る湖が視界に飛び込んできた。湖面には波ひとつ無く、吸い込まれそうなほどに澄み切っていた。

湖畔に位置するホテル街に着いた時刻は、午前十時を少し過ぎていた。そこには僅かながら人影が見えていた。村で一番というホテルを目指すのは簡単なことだった。

湖畔に佇む十階立てホテルの地下駐車場に車を滑り込ませた。

フロントには予想通り、忍の姿があった。今はひとりで受付を行っていた。制服姿が眩しい。切れ長の美しい

二重瞼にほっそりとした鼻筋で、口元がセクシーである。少し茶系に染めたセミロングの髪を自然な感じで肩まで垂らしていた。

「久しぶりだね」

九竜は忍の瞳の奥を覗き込んだ。

「……」

忍は暫し言葉が思い浮かばないようだ。九竜の顔を見て、腰のガンベルトに視線を向けた。

「今日は任務で来たんだ。悪いがこのホテルを一時閉鎖させてもらうよ」

「……どういうことですか？」

困惑した表情の中に怒りが垣間見えた。

「君も村の様子がおかしいことに気が付いているだろう？」

「いえ、最近、ここを出ていないので……」

「この村は汚染されているんだ。どういう訳か、この一

帯は無事だが……」

「……」

汚染という言葉に、思い当たることがあるのか忍は押し黙った。以前、事務所にアルバイトで来ていた頃、仕事の内容を薄々は感じていたようだ。

「支配人に会いたい」

「今、呼んで来ます」

忍ははっと我に帰り、フロント奥にある部屋に消えた。暫くして奥の部屋から、黒髪をオールバックにまとめた中年の男を伴い現れた。面影が忍に似ていた。落ち着いた感じの男だった。

「支配人の沖田達郎です」

忍はあくまで事務的な口調だ。

「警察庁警備局の九竜と申します」

「娘が以前、お世話になりました、その節は有難うございました」

「こちらこそ。忍さんにはお世話になりました……。と  
ここで、突然ですが、このホテル、いやこの界限で営業  
中の宿泊施設はすべて、閉鎖していただきます。すぐに、  
近くの町に避難して下さい」

九竜は、忍の父でもある沖田の視線を直視することが  
できなかつた。

「理由は何ですか？」

忍から話の概要は聞いていたらしく、驚いた表情は見  
せなかつた。

「詳しい話は国家機密なので話せませんが、あるウイル  
スに汚染された住民が、凶暴化して、非感染者を襲って  
います。この村は九十%以上汚染されているようです」

「国家機密ですか……」

沖田は腕組をして目を閉じた。

「関係者の皆さんを集めて下さい。事は一刻を争います。  
日没までにこの村から退避しなければ、生命の保証はで

きません」

それから十五分後には、主だったメンバー十人が一階ロビーに集められた。

皆、中年か初老の男達であった。九竜は沖田に話した内容を、さらに詳しく皆に説明した。関係者は驚きを隠せず、口々に不平を漏らした。

「ここは、俺達の村だ。余所者にとやかく言われる謂れはない！」

「そうだ。国が商売の損失を補償してくれるのか？」

「うちだって宿泊客がいるんだ！」

結局九竜の説明は不調に終わった。誰もことの深刻さを十分には理解していなかった。

「わかりました。まだ時間がありますので、皆さんに提案があります。私はこれから汚染者の駆除にまいります。

皆さんのうちのどなたかご同行願えませんか？そこで見たことを帰ってから、皆さんに報告していただきます」

少しの間、関係者同士で話し合っていた。

「私が行きましょう」

ホテル支配人の沖田が前に進み出ようとした。

「父さんは駄目よ。私が行くわ」

それまで後ろで聞いていた忍が前に出てきた。

「父は腰を痛めていて無理ができません。私に行かせてください」

「そうだな。若い者の方がいいんじゃないか」

「忍ちゃんは女だぞ」

「俺も行くぞ。忍は俺が守る」

それまで、最後部で沈黙を守っていた初老の男が前に出てきた。男は身長が百八十センチ近くあり、頑強な体付きで、日に焼けた精悍な容貌をしていた。

「じっちゃん！」

忍が嬉しそうな声を上げた。

「源さんが行くなら間違いないな」

「これで忍ちゃんも安心だ」

九竜は男の名前と容貌から、記憶の糸を手繰り寄せていた。男のことは以前、忍から聞いていた。今年で七十歳になる筈だが、とてもそんな年齢には見えなかった。せいぜい六十歳くらいだ。

忍から、男が若い頃に、鉦でヒグマを撃退したとか、村に來た暴走族の連中を湖に叩き込んだなどの武勇伝を聞かされていた。

「いいでしょう。忍さんと、源蔵さんのお二人にご同行願います。それと最後に一点質問があるのですが、皆さんの中で村に異変が起きていることを知っていた人はいますか？」

「異変かどうかわからないが、真夜中になるとあっちの

方から、女の悲鳴や獣のような唸り声が聞こえていました」

最前列にいた中年男が、おずおずとした調子で話し出した。

「警察には通報しましたか？」

「はい。村の駐在所に何度も通報しています」

「それはいつ頃ですか？」

「確か、二週間前くらいです」

九竜にとり、そのことは非常に不審だった。組織に情報が入ったのは、三日前のことなのだ。汚染が村中に広がるのに最低でも二週間はかかる筈であった。何故、駐在所の警官は、報告を怠ったのか。

三人は、五分後には、ホテルを出て九竜が運転する作戦車に乗り、村の中心部に向かっていた。

「最初に駐在所に行きます。道順を教えてください」

九竜は、助手席に座った忍に道を尋ねた。

「この道を真っ直ぐに進んで下さい」

九竜は、謎解きから始めようと考えていた。忍は人通りが絶え、まるでゴーストタウンのような街並みをぼんやりと眺めていた。源蔵は後部座席に座り、各種の計器類を珍しげに見詰めていた。駐在所には十五分ほどで到着した。中心街の外れに位置していた。

「車の中で待っていて下さい」

「いや。私も行きます。皆に報告する義務がありますので」

「じゃあ。俺も行くぞ」

九竜は苦笑を浮かべただけだった。忍達と一緒にいる方が、話が早いかも知れないとも考えていた。駐在所の中に人影が見えていた。九竜は、ホルスターの留め金を外し、ゆっくりと歩き出した。

「忍ちゃん。何しに来たんだ！」

駐在所から警官が二人駆け出してきた。どうやら、この村で忍を知らない者はいないらしい。ふたりとも三代始めころに見えた。

「警察庁の方に、案内するよう言われたんです」

「警備局特殊二課の九竜だ」

九竜は二人に警察手帳を見せた。二人は直立不動の格好で敬礼をした。平巡査にとり警視の肩書きは、雲の上の存在と同じだった。

「中山と申します」

「藤堂です」

「立ち話も何なんで中で話そう」

九竜が駐在所の方を見ながら言った。五人は駐在所の中に入った。

「何故、村に起きた異変について、本庁に報告しなかったのかね？」

九竜が二人の巡査を交互に見詰めた。

「しましたよ。本庁から刑事が来ることになっていたんですが……」

二人は俯き、九竜の目を見ようとしなかった。

「どうしたんだ？」

九竜は押し殺したように静かに尋ねた。

「……ある男に止められました。異常が無かったと、本庁に報告するよう言われました」

藤堂巡査が呟くように言った。

「ある男？」

九竜が藤堂巡査の目をじつと見詰めた。

「大友明という男です」

「明だって！あの糞餓鬼が……」

それまで黙って聞いていた源蔵が吐き捨てるように言った。

「どなたですか？」

九竜が源蔵に尋ねた。

「村長の一人息子だ。ずっと外国に行ってやがったが、  
一ヶ月前に急に帰ってきた」

「外国？何処ですか？」

「確かドイツだったと思います」

忍が横から口を挟んできた。

「そうだったのか……」

九竜は、それを聞いておぼろげながらことの全容を理  
解した。

「何故。大友さんに従った？」

九竜は藤堂巡査に尋ねた。

「彼の言う事を聞かなければ、この村には住めなくなる  
のです」

「……で、何が起きたんだ？」

「恐ろしいことです」

二人の巡査は九竜の問いに対し、両手で頭を抱え込み、  
ぶるぶると震え出した。

「しつかりしろ！」

初めて九竜が声を荒げた。

「最初は、観光に来ていた女子大生十名が行方不明になりました。次は、村の娘達が次々と消えていったのです。そして、大友がやってきた日の夜に……」

「どうしたんだ？」

「ば……化け物達がやってきて、村の連中を次々と襲っていきました。逃げ惑う若い女達が、裸にされ、身体を引き裂かれ……貪り食われたのです」

「化け物？」

「人間の格好をしているが、奴らは人間じゃない！」

「猟銃で撃たれても死なないんです！」

「残った男達や中年女達は何処かに連れていかれました」

二人の巡査は堰を切ったように話し始めた。

「何故、君達は無事だったんだ？」

「大友にここから絶対に出るなと言われました。此処は安全だと」

「よく話してくれた。これから二人は私の指揮下に入ってもらおう」

と、その時、突然、駐在所の電話が鳴り響いた。少しの間、五人が電話機を凝視していた。藤堂巡査が受話器に手を伸ばした。

「はい。交番ですが……」

藤堂の顔が見る間に青ざめていった。受話器を持つ手が震えていた。

「大友から電話です。奴は貴方が来たことを知っていました」

受話器を手で押さえながら九竜に説明した。それから、受話器を忍に手渡した。

「大友が、忍ちゃんと話がしたいそうだよ」

忍は無言で藤堂巡査が差し出す受話器を両手で受け

取った。九竜が忍の背後に移動し、受話器の反対側に耳を付けた。忍は逆らわなかった。

「はい。沖田です」

—— 忍ちゃん。今日はいいい返事が聞けるのかな？  
地の底から響いてくるような暗い声が聞こえて来た。

「先日も申し上げましたように、お受けできません」

—— ……そんなに俺が嫌いか？

「……」

—— まあ、いいさ。今夜、たつぷりと可愛がつてやるからな。そこにいる二枚目によろしく伝えてくれ。電話は一方的に切られた。忍は懨然とした表情で受話器を置いた。

「何で奴は、忍ちゃんがいることがわかったんだ」

藤堂巡査が受話器を見詰めながら呟くように言った。

「種明かしはこれだ」

九竜が事務机の下から、小形の盗聴マイクを取り出し

た。

「奴らだって、万能じゃないんだ。どうやら大友という奴が黒幕のようだな。……今夜は襲ってくるだろう」

九竜が独り言のように呟いた。

「ところで、忍ちゃん。大友とはどういった関係なの？  
こいつは重要なことなんだよ」

「……先日、プロポーズされました。断りましたけれど  
……」

確かに、これほどの美女をほっておく男はいないだろう。九竜は忍の容姿をまじまじと見詰めた。一瞬、醜悪な怪物に忍が、襲われ犯される様子が脳裏に浮かんでは消えた。

「そうだったのか。それで奴は君がいるホテル街を襲わなかつたんだ」

九竜は、また独り言のように呟いた。

### 第三章 呪われた街

数分後、九竜、忍、源蔵の三人は作戦車に乗り、村立病院に向かっていた。藤堂以下二人の巡査には、ホテル街の警護を九竜が指示していた。村で唯一の病院は、新築三階建て鉄筋コンクリート製で、村の中心部に建てられていた。

九竜は正面の駐車場に作戦車を止めた。

「源蔵さん。銃は使えますか？」

「散弾ならよく撃っているぞ」

「これを使って下さい。ポンプアクション式で六発撃てます。奴らが襲ってきたら躊躇わずに撃ってください」

九竜は源蔵にアサルトライフルに似た短銃身のSPAS十五と、ポーチに入った予備銃弾数十発を手渡した。

「忍ちゃん。これを着て」

九竜は、自分が身につけていた防弾ベストを、自らの手で忍に着させた。忍は逆らわなかった。それは特注品

で至近距離からのライフル弾も防ぐことができた。九竜と源蔵は、支給品の防弾ベストを身につけた。九竜も源蔵と同様にSPAS十五を装備した。

病院内は荒れ放題だった。まるで嵐が過ぎ去ったかのように待合室のソファやテーブルが散乱していた。いたるところに黒々とした血痕が残されていた。

一行は奥に進んで行った。

「此処で待っていてください」

九竜は二人を廊下に残し、診療室の中に消えた。中々、九竜は戻ってこなかった。源蔵が、痺れを切らし、近くにあったレントゲン室の扉を開けた。内部は消灯しており、何も見えなかった。ただ、鼻をつくような血臭が湧き出してきた。源蔵は扉近くの照明スイッチを押した。

「ううう……」

突然、獣の唸り声とともに、血塗れの白衣を着て両手を大きく広げた中年女が襲い掛かってきた。両目が血の

ように赤く、口元には大量の唾が零れていた。

源蔵は銃を向ける間も無かった。腕を掴まれ、自分より二十センチも背が低い女に、投げ飛ばされた。コンクリート製の壁に、背中を強かに打ち付け、意識が遠のいた。

「じっちゃん。どうしたの？」

忍が恐る恐る中を覗きこんだ。そこには知り合いの婦長が、血塗れの白衣を着て立っていた。

「よく来たね。忍ちゃん。こっちにおいでよ」

婦長の佐々木が忍を手招いた。忍は、床に座り込んだ源蔵と、簡易ベッドに横たわる全裸姿の女を見た。女は既に絶命しているようでピクリとも動かなかった。片乳房が根元から切り裂かれ、股間も血塗れとなっていた。

「いや！」

忍が逃げようとしたそのとき、婦長が信じられないような速度で迫って来た。片手を掴まれ、中に引き摺り込

まれた。そのまま床に押し倒され、婦長が覆い被さってきた。防弾ベストを外され、衣服の上から乳房を掴まれた。

「私はね。女だけど。前からアンタを狙っていたんだよ」  
吐き気を催す様な婦長の息で、忍は息が出来なかった。恐怖のあまり声を発することができなかった。婦長の手がスカートを撒くりあげ、忍の太腿を撫で擦った。

「アンタ本当にきれいだね。それに美味しそうだね。全部食べてあげるよ」

「そこまでだ」

背後から九竜の声が聞こえて来た。婦長の姿が掻き消え、乾いた銃声が聞こえた。同時にガツンという爆裂音が聞こえ、九竜に襲いかかろうとしていた婦長の頭部が粉々に砕け散り、脳漿と鮮血が天井を染め上げた。頭部を失った婦長の身体が、二、三步九竜に歩み寄り、床に倒れ込んだ。

「大丈夫か？」

九竜が、銃口から硝煙が出ているSPAS十五を肩にかけ、床に横たわっていた忍に手を差し伸べた。

「じっちゃん！」

忍は九竜の手を払い除けて、立ち上がり源蔵のもとに走った。源蔵は息を吹き返していた。忍の肩を借りて立ち上がった。

「あんたが村の女を殺したのか？」

源蔵が、床に横たわる首無し死体を見詰め、吐き捨てるように言った。

「俺が助けなかったら、今頃、源蔵さん。あんたは手足をもぎ取られ鬨り殺しにされている筈だ。忍ちゃんは犯された後で、全身の血を吸い尽くされ、肉を貪り食われているよ」「肉を食べるだど？」

「信じないのか？」

九竜は簡易ベッドに横たわる女の切り裂かれた乳房

や股間を見ながら、腰のポーチから手術用手袋を取り出し嵌めた。細身のナイフをブーツから引き抜いた。床に倒れている首無し死体を裏返しにして、腹部にナイフを突き刺した。

「貴様、何をするんだ！」

源蔵が怒声を放った。

「これには、死体損壊罪は適用されない」

九竜は、源蔵を無視し、独り言のように呟きながら、腹部を縦に切り裂いた。

分厚い脂肪層を切り裂き、内臓を剥き出しにさせた。両手で胃を取り出し床に置いた。忍は源蔵の背後に隠れるようにして、顔を伏せていた。血塗れの胃を縦に切り裂いた。中から肉塊が出てきた。

「これを見てみる」

九竜が手にしているのは、人間のものと思われる指先と、陰毛が付いた臍の部分と乳首だった。源蔵が両目を

見開き、九竜の手の平に載せられた肉片を凝視していた。

「うっ……」

という呻き声を上げ、源蔵は両手で口を押さえ、俯いて床に嘔吐した。

「これは少し前に、この女が、ベッドで死んでいる女の肉を喰った証拠品さ」

「もう止めて！」

忍が両手で耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んだ。

「忍ちゃん。これが現実なんだ。この村は悪魔に支配さ  
れているんだよ」

九竜達は、レントゲン室を出て他の部屋の探索に向かった。忍は多少気を取り直していた。しっかりと源蔵の手を握り締め歩いていた。廊下には肉が腐ったような腐敗臭が漂っていた。一行は臭いがする方に進んだ。一階の奥まったところに食堂があった。一行はテーブルや椅子が散乱する食堂を進んで行った。奥に厨房があった。

臭いはそこから出ていた。

一行は息を詰め、厨房に踏み込んだ。

「いや！」

忍が悲鳴を上げ、よろめいた。九竜が素早く忍の身体を支えた。忍は意識を失っていた。九竜と源蔵は見た。

調理台やシンクの中に、切り裂かれた若い女の死体が積み重なっているのを。数十体は数えられた。手足を切断され、腹を割かれ腸がはみ出している女や、片尻を切取られている女もいた。皆、目を見開き苦悶の表情を浮かべていた。生きたまま捌かれたのは明らかだった。ガズオーブンの中には、腰の部分が入れられていた。

「奴らの食糧さ。血だけでは生きていけないからな」

九竜の空ろな声が厨房に響いた。

「帰ろう！もうたくさんだ」

源蔵が叫ぶように言った。

「待て。もう一箇所確認したい」

九竜は、厨房奥のある扉を開けた。中から冷気が吹き出してきた。そこは冷凍倉庫だった。照明が点いたままになっており、首と手足を切り落とされた若い女のものと思われる胴体が天井から吊り下げられていた。数十体のもの胴体が、牛や豚などの家畜のように吊るされているのだ。

「奴らは人間じゃない！」

源蔵の拳が震えていた。

九竜達は、その場を後にして、作戦車に向かった。失神した忍を背負ったのは九竜だった。源蔵の混乱と衝撃は想像以上だった。呆然とした表情で九竜の後に続いていた。作戦車に戻り、九竜は武器庫から長さ六十センチほどのムカデ型ロボットを持ち出した。長方形の胴体に十本の足が付いていた。それを車外に置き、車内に戻った。

「何をしているんだ？」

後部座席に座っていた源蔵が聞いてきた。

「奴らを処分する」

「処分？」

「これ以上は言えない」

「国家機密か？」

源蔵は鼻で笑った。忍はまだ意識が戻らず、背もたれを倒した助手席に横たえられていた。九竜が空いている後部席に座り、パソコンの電源を入れた。モニターに先ほどのムカデ型ロボットが映し出された。キーボードを叩くと、ロボットが動き出した。人が小走りするぐらいの早さで病院内に侵入していった。

画面に病院内の様子が映し出された。ロボットに搭載したカメラに切り替わったのだ。ロボットは十本の足を器用に動かし、階段を降りて行った。地下の霊安室に向かっているのだ。地下は非常灯の明かりがあるのみで薄暗かった。霊安室のドアは開いていた。ロボットが中に

滑り込んだ。ロボットはドアの近くに置かれていたテールブルの影に身を潜めた。

中は裸電球の暗い光が灯されていた。三十畳ほどの室内には、おびただしい数の人間が蠢いていた。その中に、全裸の若い女も数名混じっていた。複数の男女に抱きつかれ、全身を舌や手で弄られていた。なんども逝かされたようであり、呆然とした表情で為すがままだ。

ひとりの若い女が、中年女に尻を舐められていた。臍の中には指を入れられ掻き回されているようだ。深い尻の割れ目は、中年女の唾液で濡れていた。美しい桃尻が、中年女の巧みな舌の愛撫のためか、淫らに蠢いていた。

突然、肉を裂くような音が聞こえ、女が絶叫を上げ、全身を震わせた。女の尻を舐めていた中年女の口元から、噛み裂かれた女の尻肉がはみ出していた。女の悲鳴を合図に、周りにいた男女が、全身を噛み裂き、噴出す鮮血を啜り、柔肉を食い千切り咀嚼した。その女は生きなが

ら血を吸われ肉を食われていた。

「何故、黙って見ているんだ！」

背後からモニターを見ていた源蔵がSPAS十五を手にし、車から出ようとした。

「大人しく座っている！」

九竜は源蔵のコメカミに、レイジングブルの銃口を突きつけた。

「俺達だけではどうにもならない。返り討ちにあうだけだ。それに女はもう助からない」

九竜の言うとおりに、残っていた女達も全身を噛み裂かれ、苦痛に身悶えしていた。最初の女は既に絶命し、かなりの部分を食われ、白い骨を露出させていた。

「臆病者が！」

源蔵が吐き捨てるように言い、九竜の目を見据えた。

「撤収する」

九竜は相手にせず、運転席に戻り作戦車をスタートさせ

せた。病院から五百メートルくらい離れた地点で、懐から携帯電話を取り出し、ボタンを押した。背後から閃光が閃き、すぐに大地を揺るがするような爆音が聞こえて来た。ロボットに仕込まれていた高性能爆薬が爆発したのだ。鉄筋コンクリート三階建ての病院が、跡形も無く吹き飛んだ。衝撃で忍の意識が戻った。

「私どうしたんですか？」

運転席の九竜に声をかけてきた。

「少し気を失っていたんだ。大したことはないよ」

「あつ……」

突然、忍の視線が宙を泳いだ。大きな瞳から涙が零れ落ちた。忍は先ほどの惨劇を思い出していた。膝を抱えるようにして俯いて嗚咽を漏らした。

「忍……。怖かったよな。ジツチャンが、付いていたのに済まねえ」

源蔵が後部座席から手を伸ばしてきて、忍の背中を擦

った。

それから、九竜は、村で唯一の小学校を探查した。最も源蔵も作戦車から決して降りようとはしなかった。最後には、病院と同様に爆薬で吹き飛ばした。

九竜達がホテルに戻ったのは正午過ぎだった。忍と源蔵が仲間達に状況説明を行うのを確認し、今夜の待避所作りに取り掛かった。九竜は、これで村人が避難するものと安心して待避所はホテルの出口や窓を塞ぎ、要塞化しようと考えていた。巡查二人に、鉄骨や溶接機を調達するために、村で唯一の機械工場に走らせた。ホテルの支配人である沖田は、ホテルを使用することに渋々ではあるが同意した。

九竜は、地階の駐車場と一階を要塞化しようと考えていた。二階へと通じる階段ホールの非常扉を閉めて、作戦車から持ち出した溶接機で扉と壁を溶着させて閉鎖した。その作業が終わる頃には、藤堂巡查達が、四トン

トラックに鉄骨や鉄板や溶接機を満載にして戻って来た。三人で手分けして窓と言う窓に鉄板を貼り付け、鉄骨で固定した。正面扉の前には、近くの土木現場から持ち出したブルドーザを止め、さらに扉の内側には鉄板を貼り付け、鉄骨で固定した。

各鉄板には、屋内配線から通電できる仕組みにした。侵入者を感電させるためである。地下駐車場に隣接する非常電源室には、発動発電機用の燃料が十日分も収められていた。これで外部電源を止められても、何とかしのぐことはできるだろう。地下駐車場への出入り口部分に、タイヤショベルに鉄板を溶接したブルドーザを停車させることにした。鉄板部分で、シャッターの内側から塞ぐものであり、ブルドーザを移動することで出入り可能な可動式とした。作戦車は地下駐車場に停車させた。

九竜は地下駐車場で、直径一メートルほどのマンホールの蓋を見つけた。少しの間、顎を撫でながら、それを

眺めていた。おもむろに両手で蓋を持ち上げようとした。かなり重い。両腕に渾身の力を込めた。蓋が少しずつ持ち上がっていく。最後には一気に引き上げ、横にずらした。そこには暗い豎穴が、口を開けていた。耳をこらしてみたが何も聞こえなかった。中の空気は乾いているようだ。腰のホルスターからレイジングブルを引き抜き、床に膝を付いて暗闇を覗き込んだ。何の気配もしなかった。ズボンのポケットから携帯電話を取り出した。

「アリサか？九竜だ」

———どうしたんですか？

「調べて欲しいことがある」

———何ですか？

「K村にあるS湖畔ホテルの地下駐車場にいるんだが、人口の豎穴を見つけた。それが何の目的で造られ、何処に繋がっているか調べてくれ」

———了解しました。

九竜は携帯電話をポケットに納めながら、苦笑を浮かべた。電話の向こうから若い女の喘ぎ声が聞こえていたのだ。アリサが監禁中の由香と二人で真由美を責め抜いているようだった。三人の白い裸身が絡みつく様を一瞬ではあるが思い浮かべた。首を振り、苦笑いを浮かべながら、マンホールの蓋を元に戻した。防御を整えてから、攻撃の準備に取り掛かった。ホテル上階部の二部屋に五十口径機関銃を二機設置した。十二・七ミリ重機関銃M二の改良型であるその銃器は、射撃主が不要な完全自動射撃機能を備えており、毎分四百五十から五百五十発の発射速度で五十口径弾を連射することができた。照準は、赤外線及び可視光による画像認識仕様である。さらに改良型九十六式四十ミリ自動てき弾銃を一機設置した。これも自動で照準、射撃が可能であり、四十ミリグラナード弾を発射速度…二百五十〜三百五十発／分で連射することができた。両機種とも装弾数を大幅にアップさせて

おり、十二・七ミリ重機関銃M二であれば三千発、四十ミリ自動てき弾銃であれば、三百発の給弾が可能であった。

屋上には証明弾の発射機を設置した。これらはすべて遠隔操作が可能であった。

九竜は、それだけでは満足せず、ホテル周辺部の敷地に地雷や遠隔操作の爆薬を埋設した。作戦車の武器庫に収納していたすべての武器を使用することにしていった。それでも、二日持ちこたえるのがやつとであると九竜は考えていた。

攻撃準備を終え、最後に居住スペースの確保に取り掛かった。一階の居住スペースは、レストラン部分とフロント裏の関係者控え室を改造し利用しようと考えていた。八畳あまりの控え室には、シャワー兼トイレ室も付いていた。レストランに隣接した厨房へと繋がる食糧倉庫には、数人なら一年間あまりも利用可能な肉類や穀類

さらには冷凍された野菜類が保存されていた。調理には当然のことながら厨房を使えば良かった。あらゆる調理器具が揃っていた。

地下駐車場に隣接するワイン蔵には年代物の高級ワインが、数千本も収められていた。

備えは万全であった。巡查二人は九竜と行動をともにすることを決意していた。当初、住民とともに避難を勧めたが、九竜に協力したいと申し入れてきた。大友に協力してしまった罪悪感のためかも知れなかった。すべての準備が終了したのは、日没まで三十分あまりの時刻であった。九竜が、地下駐車場に駐車した作戦車で、アリスと連絡を取り合っていた時に、忍がひとりで尋ねてきた。出入り口はまだ、封鎖していなかった。

「忍ちゃん。何で逃げなかったの！後、三十分しかないんだよ」

住民は全員、退避したものと考えていた。

「ここの人達は全員残ることにしたんです」

「何だって！冗談じゃない。皆、罾り殺しにされるよ。」

君だって見ただろう？あいつらの正体を」

「……助けて下さい。貴方に頼るしかないのです」

「ふざけたことを言ってもらっては困る。俺の仕事は民間人を保護することじゃないんだ」

「わかっています。それを敢えてお願いしているんです」

「……わかったよ。ただし、一つだけ条件がある」

「何でしょうか？」

「君が俺の女になることだ。妻でも愛人でもない。俺の命令には絶対服従の奴隷だ」

「そんなこと……」

忍は絶句した。

「君達を保護することは、非常に大きなリスクを背負うことになるんだ。条件が聞き入れないんなら、交渉決裂

だ。帰ってくれ。俺は忙しいんだ。日没まで二十五分しかない」

九竜は冷たく言い捨てて背を向けた。建物の各所に取り付けた監視カメラの動作を確認し始めた。

「貴方は私のことを恨んでいるのね……。いいわ。貴方の女になります」

「口では何でも言えるんだ。それなら証拠を見せてくれ」

「証拠？」

「着ているものを全部脱いで、その上で四つん這いになれ」

九竜が、銃器を置いた作業台を指差した。

「……」

忍の大きな瞳が、九竜の顔を睨み付けた。眸から大粒の涙が零れ落ちた。

「貴方は最低の男ね」

「そうさ。俺はクレージなヴァンパイアハンターさ。で  
きないんなら帰ってくれ」

九竜は再び背を向けた。背後から衣服を脱ぐ音が聞こえて来た。



「……準備ができました」

振り返ると忍が作業台の上で四つん這いになり、九竜にシミひとつない剥き卵のような美尻を向けていた。

「きれいなケツじゃないか！匂いを嗅いでやる」

九竜は下品な言葉で忍に追い討ちをかけた。目の前に夢にまでみた極上の尻がそえられていた。その白い尻がさめざめと震え慄いていた。忍の低い嗚咽が聞こえてきた。九竜は両手で尻を押さえ、合間に顔を押し付けた。心から愛し、恋焦がれた女の尻は、何にも増して甘美な匂いがした。興奮のあまり脳が破裂しそうだった。

「臭くないな。ウオシシュレット使っているだろうか？」

上擦った声で言い、瞳とアヌスを狂ったように舐めあげた。忍は作業台に顔を付けて号泣していた。

「今は時間がないから、これで許してやる。皆を此処に連れてきてくれ。後、十五分しかない」

忍は泣きながら、衣服を身に付け始めた。決して九竜

の顔を見ようとはしなかった。五分後、地下駐車場に住民四十人あまりが集まった。初めて見る顔もあった。その中で二十歳くらいに見える若い女達の集団が目についた。

「あの人達は、此処の住民ではないですね？」

九竜は支配人の沖田に尋ねた。

「はい。宿泊予定者です」

「このホテルには誰も泊まっていなかったじゃないですか？」

「今日、来られた方達です。昨日まで山奥にあるペンションに泊まられていたのです」

「そうでしたか」

九竜は、この村に繋がる道道が自衛隊によって閉鎖されているにも関わらず、彼女達がやって来られたのが不思議ではあったが、簡単に謎は解けた。

「これで全員ですね？」

九竜は改めて住民達を見渡した。過疎による影響か、ほとんどが四十歳以上であったが、宿泊客以外の若い女性の姿も見えた。都会に出ていた娘達が戻ってきているのだ。小中学生くらいの少年少女が数名含まれていた。皆、着の身、着のままの風体であり、不安げに肩を寄せ合っていた。

「これで全員です」

「わかりました。藤堂巡查。出入り口を閉鎖してくれ」  
「了解しました」

藤堂巡查が、手筈どおり地下駐車場のシャッターを下ろし、ブルドーザを出口のところに止め閉鎖した。

「日没まで五分しかありませんが、これから皆さんに武器弾薬をお渡しします。家族の代表者は前に出てください」

九竜は、作戦車から持ち出した二十丁あまりのS P A S十五と弾薬箱を、各家族の代表者に手渡した。

「簡単に操作方法を説明します」

九竜はSPAS十五を操作しながら、ひととおり説明し、駐車場の中央付近に止められていた白色のセダンに狙いを付けた。

「何をするんですか？あの車はお客様の……」

支配人の沖田が慌てて制ししようとした。

「緊急事態なんです。口頭説明だけでは不十分だ」

いい終えると同時に引き金を引いた。爆裂音が響き、ボンネットが宙に舞い一瞬で、そのセダンは猛火に包まれた。九竜があらかじめ、スプリングラーの電源を止めていたので、その場にいた全員が水しぶきに濡れることは無かった。

二人の巡査が、消火器を持って走りより消化させた。鎮火を待って、ひとりひとりに撃たせた。満足に命中させたのは源蔵を含む数人だけであった。射撃が不得手と思われる者には、スラッグ弾の代わりに散弾の九粒弾を

持たせた。

スラッグ弾同様に、弾頭部に高性能炸薬が仕込まれており、威力は絶大であり、さほどの腕も必要としなかった。形ばかりの射撃訓練を終え、全員で一階に上がったのは日没を少し過ぎた時間だった。宿泊客を含む住民達には、レストランを宿泊スペースとして使わせた。レストランを何分割かにして、宿泊客の娘達十名と、住民の八家族が衝立で境界を作り自分達の居場所を確保した。布団や毛布などの寝具はいくらでもあった。

九竜は、レストランの入り口に立ち、全員の様子を監視していた。そのとき、忍がポストンバックを持ち、九竜の前に進み出てきた。

「私はどうすればいいんですか？」

「俺はフロント奥にある関係者の控え室を使うつもりだ。君にも来て貰うよ」

「わかりました」

忍は小走りに家族のもとに戻り、支配人の沖田や源蔵に話し掛け、すぐに戻ってきた。忍の家族達は、不安げな様子で忍の後姿をじっと見詰めていた。

「行こう」

九竜は、忍を従えてフロント奥の控え室に消えた。控え室に入ってすぐに九竜は忍に抱きついた。忍は逆らわなかった。両手で抱き締め、唇を奪った。舌を吸出し存分に吸った。忍の尻から涙が零れ落ちた。

「素っ裸になれ」

九竜は忍をベッドの上に転がした。

「大丈夫なんですか？」

「奴らのことか。心配するな。当分やってこない筈だ。来るとしたら真夜中過ぎだな」

「騙したのね」

「何がだ。奴らは日没後に行動を開始する。だが、詳細な行動パターンは不明だ。俺は三箇所の村を処理した。

そのときは深夜にやってきた。それだけのことだ。今回もそうなるとは限らない。早く脱げ。この部屋にいるときは全裸でいろ」

忍は九竜の顔を一瞬睨み付け、すぐに視線を逸らせた。躊躇いがちにシャツのボタンを外し始めた。すべてを脱ぎ、胸を片腕で隠しベッドに腰かけていた。

「シャワーを使わせて」

「駄目だ」

九竜はゆっくりと、ベッドに近付いた。

「まず、お前の匂いを楽しんでからだ」

九竜は忍の肩を蹴って仰向けに寝かせた。乱暴に両足首を掴んで、大きく広げた。サーモンピンク色の膾やアヌスが剥き出しにされた。

「最高の眺めだな。垂涎ものだぜ」

「獣！」

「獣の俺に救いを求めたのは何処のどいつだ」

九竜が掴んでいた忍の足首を離した。

「そんなに私が憎いの？」

忍が挑むように言ってきた。

「憎い？お前に告白して無視されたことを言っているのか？」

「違うの？」

「お前は顔も身体も極上だ。そして頭もいい。見かけによらず気も強い。……そうだ。俺はお前に首ったけだった。……何故、何も言わず、何も残さず、俺のもとを去ったんだ？」

九竜はゆっくりと搾り出すように言葉を続けた。

「貴方には奥さんがいるじゃない。それなのに私にどうすれば良かったというのよ。貴方の家庭を破壊して、奥さんから貴方を奪って一緒に逃げれば良かったというの！」

最後の言葉は絶叫に近かった。

「カミさんとは別れた。君のせいじゃない。俺の仕事が耐えられなかったんだ」

九竜は、ボソリと呟くように言葉を吐いた。暫く二人の間に沈黙の時間が流れた。

「家族のところに帰っていいよ」

九竜は忍に背を向けた。

「いやよ。帰らないわ。私は、この身体で貴方と契約したのよ。家族や知り合いの人達を守ってもらうように。命にかえても守り抜いてちょうだい！」

「……」

九竜が無言で動いた。忍の股間に齧り付き、音を立てて膺やクリトリスを吸いまくった。愛する女の秘部は蜜のように甘い味がした。舐めても、舐めても激情が収まることは無かった。裏返しにして深い尻の割れ目に顔を押し込み、アヌスを食べるように舐った。忍は喘いでいた。白い裸身が身悶えしていた。

四つん這いにさせ、背後から貫いた。片手で重たげな乳房を揉みながら、もう一方の手でクリトリスを刺激しながら、激しい勢いで腰を前後させた。

忍は数分でアクメに達した。九竜は余韻に浸る忍を仰向けにさせて、正上位で貫いた。唇を奪い、舌を存分に味わいながら、腰を激しく動かした。もう何も聞こえなかった。忍の甘い唾液の味が脳を焦がしていた。

#### 第四章 悪鬼の群れ

へと続く。